

# 川へふなをにがす

小川未明

青空文庫



少年<sup>しょうねん</sup>は、去年<sup>きょねん</sup>のいまごろ、川<sup>かわ</sup>からすくいあみで、ふなの子<sup>こ</sup>を四、五ひきばかりとつてきました。そして、庭<sup>にわ</sup>においてあつた、水盤<sup>すいばん</sup>の中<sup>なか</sup>に入<sup>い</sup>れました。ほかにも水盤<sup>すいばん</sup>には、めだかや、金魚<sup>きんぎょ</sup>がはいっていました。

「けんかを、しないだろうかね。」と、少年<sup>しょうねん</sup>は、心配<sup>しんぱい</sup>しました。

「入れ物<sup>いもの</sup>が、大<sup>おお</sup>きいから、だいじようぶだろう。」と、友だち<sup>とも</sup>がいました。

赤<sup>あか</sup>い金魚<sup>きんぎょ</sup>、黄<sup>きいろ</sup>色なめだか、うすずみ色<sup>いろ</sup>をした、ふなの子<sup>こ</sup>は、思<sup>おも</sup>い思<sup>おも</sup>いに泳<sup>およ</sup>ぎまわっていました。まだ小<sup>ちい</sup>さいから、こんな中<sup>なか</sup>でも広<sup>ひろ</sup>い世界<sup>せかい</sup>と思<sup>おも</sup>うのか、満<sup>まん</sup>足<sup>ぞく</sup>するように、べつに魚<sup>さかな</sup>どうしで、けんかをするようすも見<sup>み</sup>えませんでした。

その後<sup>ご</sup>、雨<sup>あめ</sup>のふる日もあつたし、また、月<sup>つき</sup>の照<sup>て</sup>らす晩<sup>ばん</sup>もありました。そのうち、秋<sup>あき</sup>になり、冬<sup>ふゆ</sup>となつて、だんだん水<sup>みづ</sup>が冷<sup>つめ</sup>たくなると、しぜん魚<sup>さかな</sup>たちは、元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>がなくなつて、下<sup>した</sup>の方<sup>ほう</sup>へ沈<sup>しず</sup>んでいました。

「兄<sup>にい</sup>さん、ずいぶん魚<sup>さかな</sup>が、すくなくなつたね。」と、弟<sup>おとうと</sup>が、庭<sup>にわ</sup>へ出<sup>で</sup>ると、いいました。

ともかく、寒<sup>さむ</sup>い、水<sup>みづ</sup>の凍<sup>こお</sup>る冬<sup>ふゆ</sup>をこし、あたたかな春<sup>はる</sup>になるまでに、生<sup>い</sup>きのこつたのは、わずか五、六ひきしかありません。その中<sup>なか</sup>に、ふなが二ひきいました。

「強いやつばかり、のこったのだな。」

弟は、水盤すいばんをのぞきながら、

「ごらん、兄さんにい、ふなが、あんなに大きくなつた。」と、いつて、びつくりしました。

「よく生きてたね、川魚かわぎさは、じきに死ぬしんだがなあ。」と、遊びあそびにきた、友だちも、

ふなを見て、いまさらのように、めずらしました。

それより、少年しょうねんは、ふつう、飼魚かぎかなでもない、ふなのうろこが、水のぬるんだため、紫むらさきばんで、なんとなく野性やせいのにおいがする、すがたをたまらなく、美しく感じたのです。

「小さいうちから、この入れ物いものの中で、そだったので、生きていたんだね。」と、友だち  
はいいました。

これは、子どもにとつて、うれしいことだったけれど、また、ふなの身みになつて考えかんがえれば、かわいそうなことでもありました。川かわを知らないふなは、おそらくここをすみかとして信じ、安心あんしんしているのだらうけれど、だれがふなに川かわを知らせなかつたのかと、子どもらは思わずにいられませんでした。

ある日、金魚屋きんぎょやが、家の前まえを通りました。その声こえをきくと、少年しょうねんは、あの目めに  
みるような、赤あかいいきいきとした色いろがちらつき、じつとしておれずに、弟おとうとといっしょに外そと

へとび出しました。今年も、金魚を買って水盤へ入れると、新しく仲間入りをした金魚は、さすがに飼う魚だけあって、あわてずゆうゆうと、長い尾をふりながら、花の咲くすいれんのかげを、いたり、きたりしました。ふなはいつものように、かくれていて、すがたを見せませんでした。

午後から、急に空が暗くなつて夕立がきそうになりました。兄弟が、縁側で話をしていると、ぽつりぽつり雨がふりだしました。

「いい雨だね。」

「ああ、これで野菜が生きかえるよ。」

見ると、水盤の面にも、さざなみが立っていました。このとき、

パチン！と、水音がして、ふなが、二、三寸も高くはねあがりました。

「川だと思つて、喜んだのだね。」と、弟が、目を輝かせました。

その夜は、たくさん星が出て、空が洗われたようにきれいでした。少年は、いまごろ川では、魚たちが、流れを、自由に上つたり下つたり、するであろうと、その姿を想像したのです。もし、人間でやさしい心をもっていたら、こんなせまい入れ物の中へ、魚を入れておくのを、わるいと思わぬものはなかつた、考えたのです。

あくる日、  
少年は、弟をつれて、  
ふなを川へにがしにいきました。

# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房

1952（昭和27）年1月

※表題は底本では、「川《かわ》へふなをにがす」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 川へふなをにがす

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>